

歴博甲本「洛中洛外図屏風」に描かれた犬馬場の位置

藤原重雄(東京大学史料編纂所)

●はじめに—研究課題としての犬追物—

犬追物とその馬場(犬馬場)

- ・走狗を騎射する武芸。中世の武士に必須。武技の訓練でありつつ、高度なルール化。
- ・実施にあたっての諸準備。関与する人々。施設を伴う場(犬馬場)が設けられる。
- ・競技者の交際があり、開かれた見世物にもなる。広義のスポーツ史。
⇒社会史、さらには政治文化史の研究課題に。
⇒本発表は景観復元や都市社会史の関心と共振。

芸能史研究の対象としての犬追物

- ・芸能史研究会の設立理念:
古典芸能・民俗芸能に限定されない諸芸能。社会的な条件・歴史的な背景。
- ・芸能史研究の拡充。武芸・武道史的要素の取り込み。敬遠されてきた犬追物。
- ・基礎的な情報の集成、故実書・伝書の調査、芸能内容の実態的理解、史料集の編纂。
※『群書類従』『日本馬政史』依存を抜けきれない。『日本庶民文化史料集成』9遊び(鷹書)。
* 今村嘉雄・小笠原清信・岸野雄三編『日本武道全集』3 弓術・馬術(人物往来社、1966年)
* 島田勇雄「犬追物と犬詞との関係についての試論」(『甲南女子大学研究紀要』13、1977年)

社会史研究からの犬追物への着目

- ・洛中洛外図屏風(や絵画史料)が論点化の端緒
 - ・関与する人々と場への注目
被差別民(河原者):川嶋將生
小地名・「社会史」的関心:服部英雄
- ⇒洛中洛外図屏風に描かれた犬追物の場所の再検討
上京北端地域の景観復元から、関わる人々の動向へ

犬追物に関する絵画史料

- ・歴博甲本、東博「月次風俗図屏風」、扇面(南禅寺貼交屏風ほか):室町期に画題化
- ・犬追物図屏風:系統分類、その後の新出作品 * 安達啓子・安田篤生
- ・伝書類に含まれる図絵(作法・馬場)、行事絵・記録画

絵画史料研究の関心から

- ・洛中洛外図屏風の研究:《祖型》の想定とその内容・背景
- ・史料に潜在する力を引き出す論点・方法を探る (⇔課題前提型の研究)
- ・〈いわゆる「社会史」的関心⇔文化史
広義の政治(人間関係に働く力)と文化的規定。人間社会を構成する基幹的な原理。

●1、洛中洛外図屏風の構成原理・《祖型》

国立歴史民俗博物館所蔵「洛中洛外図屏風」

詳細画像:同館サイト>資料・データベース>Web ギャラリー>屏風

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_1.html

現存最古の「洛中洛外図屏風」。『実隆公記』に永正三年(1506)土佐光信筆「一双画京中」の記事があり、さらに遡って《祖型》が成立。

屏風一双に、洛外の名所と市街地域(上京・下京)とを地理的な整合性をもって(絵地図として)併せ収め、四方四季の原則にもとづき景物を布置する。

市街地域を屏風左右隻へ振り分ける原理:

一条室町を基点に[東・南]と[西・北]を各隻に。札辻として象徴的な都市把握の基点。
(相国寺七重塔からの眺望)説は、取材でなく、屏風の画面構成という点では成立せず。
上京・下京の双子型都市構造と、屏風一双の構成は直接関係しない。

平安京の一条大路の内外という理念的な境界線。軸線としての室町通・小川通。

⇒《祖型》の成立は小川御所(義政・義尚・富子)が機能ないし記憶されている時期。

相国寺塔・室町殿の焼失後、応仁・文明の乱後。(兩人没後の富子周辺→もう少し下げる)

* 藤原「洛中洛外図屏風の祖型を探る—京中図を描く視点—」

(京都府京都文化博物館編『京を描く—洛中洛外図の時代—』、2015年3月)

〈行事図像〉《祖型》において、注文主に関わる出来事(ないしそれを想起することが期待された図像)が要所に配されていた可能性がある。転写・アレンジの過程において、元の意味内容が朧化して、行事風俗図像となっているか。

犬追物:位置比定に修正を要す。將軍御所に近接し、意味ありげに見える。

* 藤原「歴博甲本「洛中洛外図屏風」に描かれた犬馬場」(2021年11月14日、史学会大会 → 本日)

能舞台:今熊野における演能(法住寺南殿池跡?)。六月会における諸芸能。

細川政元母の今熊野山荘(→春林寺)と明応5~10年(1496~1501)の勸進猿楽。

* 藤原「洛中洛外図屏風の祖型を探る—行事図像の理解:歴博甲本の能舞台—」

(『中世文学』68、2023年6月 ← 中世文学学会シンポジウム「中世文学と絵画」、2022年5月28日)

●2、歴博甲本の犬馬場の位置比定

〈あの世〉説は無理。「特定の場所ではない」可能性まで。(「寛永絵図」を見たのか?)

* 小谷量子『歴博甲本洛中洛外図屏風の研究』(勉誠出版、2020年2月。初出2014年)

定説となっているのは、高野川東畔の川崎村「犬ノ馬場」とする川嶋將生1989説。

* 川嶋將生「川崎村の成立をめぐる」(『中世京都文化の周縁』思文閣出版、1992年。初出1989年)

川の描写の解釈。高野川・鴨川より東側を左隻[西隻]に収めるのは困難。

上京北端から上賀茂社までの地域に求めるのが穏当。

上京地域に小川が流れ込む途中の屈曲(現在は暗渠)を描いたと見なせる。

上京には(武家邸内とは別に)特定の場として(細川家の)「上の犬之馬場」があった。

その位置比定をしているのは小島道裕 2016 のみか。

*小島道裕『洛中洛外図屏風』(歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2016年3月)

地誌・地名辞典類の「射場町」の地名由来説の呪縛。

『雍州府志』曾室町家之射場在斯処、今東面人家之後園有大石、

射場町の東側は細川本邸内部。犬追物とは出てこない。「虎石」伝承は別の意味で正確か。

『応仁記』東陣モ、上ハ犬ノ馬場・西蔵口、下ハ小川・一条マテ →左隻の市街地

『不問物語』永正の錯乱「大宮ヲノホリニ蒐〔駈力〕通テ、上ノ犬之馬場口ヨリ押寄、」

古文書・古記録類から位置の確定は難しいが、固有名詞として地名表示に用いられる。

「犬馬場口」≡清蔵口。清蔵口付近に「上の犬之馬場」は所在。

●妙覚寺の境内地

『北龍華由来及沿革』所収、元禄四年(1691)妙覚寺指図・同本文

一、日記云、天正十一年癸未(1583)八月廿八日、当山今之上京地、從秀吉公拝領、
明年三月廿八日、從二条妙覚寺至新屋舗遷於寺、

一、或説云、当山上京エ引移之後、寺檀木下清蔵ト申者、別居ノ地ヲ寄附、依之境内
弥増云々、

私云、此寄附之地者、北裏之年貢地ナリ、古来ノ老僧共書集候由ニテ、当山諸品記ト
云一冊有之、其中ニモ此事アリ、同事故略之、

「妙覚寺伽藍諸堂図」:天明大火(1788)以前の様子

北側が大きく削られている。現在の鞍馬口通りよりも北にまで境内域が広がる。

200メートル四方以上の正方形を収めうる区画

*国立歴史民俗博物館編『古図にみる日本の建築』(至文堂、1989年)

*関根龍雄編『妙覚寺史』(1990年)ほか割愛

犬追物の伝書にみえる馬場の広さ:本式で約130m四方、略式で約80m四方。

「犬の馬場」地名と方形地割:城・館の周辺(特に大手口)、河原・浜などの広大な土地。

*服部英雄「犬追物を演出した河原ノ者たち—犬の馬場の背景—」(『史学雑誌』111-9、2002年)

服部英雄「旦過・犬の馬場・唐房」(同編『中世景観の復原と民衆像』花書院、2004年)

→服部『河原ノ者・非人・秀吉』(山川出版社、2012年)第一章に再編収録

*小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』(青史出版、2005年)

境内地の北側:賀茂六郷の大宮郷・小山郷の南端。詳細な復元研究。

*須磨千穎『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』(法政大学出版局、2001年)

宝徳三年(1451)復元図:「(草)御馬田」(神馬の秣田)が集中。

天文十九年(1550)復元図:南端は実検から外れる。作人「青屋者」が濃密に分布。

「青屋町」=道正町:中世の清蔵口から近いが一町南ではある。地域としては木下。

「元禄十四年実測大絵図」(1701)に「非人小屋」:史料上に居所としては見えず。

悲田院:古代の救恤施設に由緒。後花園天皇の火葬塚。文明炎上時の様子。

●むすび

歴博甲本に描かれた犬追物の場面は上京の北辺部に設けられた「上之犬馬場」に比定。小川御所・大永度御所は、上京北端にあつて、細川本邸と犬馬場とに挟まれるように位置。空間構造から〈将軍権力の自立・自律性〉を主張するのとは、相反する事実。

*都市の周縁部(一方で屋敷とは近隣)に、都市住民(階層とは別カテゴリー)の観覧をも意識した武芸競技スタジアム(馬場+棧敷=フィールド+スタンド)の再整備。

小川御所:

『宣胤卿記』文明十二年(1480)正月十日条「元細川右京大夫勝元遊覧所也、乱中有御所望、時々令渡給、花御所炎上以後為不断御所、」

*『為広越後下向日記』延徳三年(1491):細川政元、越後国府にて連日「犬馬場ニテ遊覧」。

『尋尊大僧正記』延徳二年五月十二日条「小川御所ハ自東山殿被進御台(富子)了、自御台如元細川ニ返給之、公方御座之在所也、其恐有之、不可存旨細川申入之、返上、仍鏡現〔香巖〕院殿(清晃)ニ被進之、」

上杉本「やうたいゑん」=永泰院(細川頼之) *今谷明『京都・一五四七年』237頁図

⇒潜在的な地主が細川京兆家の領域? 左隻で存在感を示す細川本邸。

周辺に存在の痕跡を残す被差別民

犬追物の開催に駆使される河原者

清蔵口付近に濃密に分布する青屋者

帰属する「河原」のない被差別民(土木作業に従事)

*野地秀俊「京都の植木職人小考」(世界人権問題研究センター編『職能民へのまなざし』同、2015年)

*野地秀俊「中世における千本と野口—河原者の場—」(世界人権問題研究センター編『中近世の被差別民像』同、2018年)

*延徳二年(1490)、足利義視、日野富子より清晃(のちの義澄)へ譲られた小川殿を破却。

『北野社家引付』五月十九日条「小河御所為三条之御成敗、被仰付河原者悉壊取也、」

『多聞院日記』(妙音院朝乗五師日並)五月二十一日条「川原者数百人被出之、彼御所ニ被入畢、」

悲田院:由緒は古代、中世の東西悲田院、近世の岡崎悲田院村の系譜関係は確定困難。

*新村拓『日本医療社会史の研究』(法政大学出版局、1985年)

*村上紀夫「一七世紀京都における悲田院 試論」(上掲『中近世の被差別民像』、2018年)

参考:「四条の青屋」の所在地は崇親院の故地?

*下坂守「中世の「四条河原」考—描かれた「四てうのあおや」をめぐって—」(『中世寺院社会と民衆』思文閣出版、2014年。初出2010年)

歴史的な社会の中で職能に従事し、都市の周縁部に存在した被差別民(一部は悲田院に拠る)が、上京北端の再編や社会変容に伴い、外側へ追いやられてゆく流れ。

●参照した主な地図類

宮内庁書陵部編『洛中絵図』(1969年)

『洛中絵図(寛永後萬治前)』(臨川書店、1979年)*京大附図

白石克編『元禄京都洛中洛外大絵図』(勉誠社、1987年)*慶応図

松本利治『京都市町名変遷史』一・御所周辺・上京区(京都市町名変遷史研究所、1988年)

松本利治『京都市町名変遷史』二・西陣周辺(京都市町名変遷史研究所、1989年)

大塚隆編『慶長昭和 京都地図集成』(柏書房、1994年)

京都大学附属図書館「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」

国際日本文化研究センター「所蔵地図データベース」

立命館大学アトリサーチセンター「近代京都オーバーレイマップ」

国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」

谷謙二「今昔マップ」

京都市史編さん委員会編『地図にみる京都の歴史』(1976年)*『京都の歴史』付図の集成

京都市編『史料 京都の歴史』上京区(1980年)・北区(1993年)

高橋康夫『京都中世都市史研究』(思文閣出版、1983年)

高橋康夫『洛中洛外』(平凡社、1988年)

今谷明『京都・一五四七年』(平凡社、1988年)

高橋康夫ほか編『図集日本都市史』(東京大学出版会、1993年)

仁木宏「中世後期京都の都市空間復原の試み」(金田章裕編『平安京—京都』京都大学学術出版会、2007年)

山田邦和『京都都市史の研究』(吉川弘文館、2009年)

河内将芳『戦国時代の京都を歩く』(吉川弘文館、2014年)

仁木宏『洛中洛外図屏風』の上京(仁木・山田邦和編『歴史家の案内する京都』文理閣、2016年)

桃崎有一郎「中世京都北郊の街路・街区構造考証」(桃崎・山田邦和編『室町政権の首府構想と京都』文理閣、2016年)

【補注】ブログ「洛中洛外虫の眼探訪」二〇一五年二月号「中世の堀川とその水源」<http://youryuboku.blog39.fc2.com/blog-entry-130.html> は、現在の小川の痕跡を丹念にたどって参考になり、歴博甲本の犬馬場の場面についても、「屏風図上の配置からこの川は高野川より賀茂川のように思える、件の二股川としたい。」という記述がある。川嶋將生氏の説(国立歴史民俗博物館ホームページの[解説](#)に踏襲されるなど、定説とみなされる)への疑問は報告者のみに帰せられる着想ではない。